A-4　山元町中浜地区　　2012年8月8日（水）

報告者名　高倉　浩樹　　被調査者生年　①1948年（男）
調査者名　高倉　浩樹　　被調査者属性　①宮司（A-2話者、A-5話者①）
補助調査者　兼城　糸絵

被調査者（主な聞き書きは話者①から）

＊話者②　1949年生（男）、中浜神楽保存会
＊話者③　1944年生（男）、不明

はじめに

今回の調査は、山元町天神社の奥の院の金庫を開ける開帳行事にかかわるものである。この行事の次第については補助調査者兼城糸絵が別報告で詳しく紹介しているのでそちらを参考にすること。以下の聞き取りは、この行事の間およびその後昼食をたべながらの懇談会の席において聞き取りをおこなったものである。話者は8人である。主な聞き取り相手は、天神社神主CTさん、神楽保存会のTKさん。それ以外に保存会や区長・副区長さん、氏子総代などであり、それぞれSSさん、ISさん、SSさん、SHさん、KMさん、SKさんという顔ぶれであった。以下の記録では、話者が明確な場合はイニシャルをつけるがそうでない場合は特につけていない。

天神社のある森の中の想い出

SSさんよりの聞き書き。昭和35年頃までは、秋になると松林で燃料集め、落ち葉拾いとキノコ取りをよくやった。松の葉はたき付け用につかった。小学校では石炭のたき付けに松の葉を用いた。松の落ち葉を疲労のは、ゴンノサライといった。ゴンとはかまのこと。リヤカーに2台分ぐらいとった。この作業を小学生はみなやった。戦後は、拾った松の葉を戦災未亡人にもっていった。その頃は助け合いの精神があった。

この近くの南川ではシジミが取れた。それを売って、学校の図書の購入費に充てた。農繁期の5、6月ごろだったと思う。キノコで取れたのは、ロクショウとかアカハラとよばれるもの。うまかったのはヒョウロウで、これはマツタケよりうまい。それから砂防工事の手伝いのバイトもあった。砂防工事のための杭を立てるもので自分が中学生のころ、一本立てると10円くれた。

天神社内の薬師堂について

現在の薬師堂は平成20年の時に屋根がこわれて修理を行った。その時に修理をした宮大工は坂元に住んでいた。門馬工務店の方である。今回の津波で犠牲になった。瓦職人の人は健在である。

天神社の場所について

現在の天神社の場所にお社がくるまで3回ぐらい場所がかわった。坂元神社の元の神主さんが土地問題で明治の頃に裁判を起こした。それで神社側が勝訴したが、地元にいられなくなって神主さんはでていった。元々は現在も天神という地名があるが、そこにあった。それが移動してきて、上記となり、さらに移動して現在の場所となった。現在の天神社敷地内のお社について。敷地内には、階段を上ってくるとまず、薬師堂がある。その左奥に、神輿堂があり、その特に天神社のお社がある。さらに薬師堂の裏側は高台になっているが、その上には山の神の堂がある。

写真１　天神社入り口

写真２　神輿

子ども神楽について

子ども神楽は 11 月頃に行う。中浜集まろう会というのがあり、そこでやろうとなった。ところが子ども神楽は磯地区の子どももやっている。となると中浜の子どもだけではできないということになり、それが（地区を越えた成員で神楽をやっていいのか）問題となる。

昔の祭り

昔は、4 月 3 日に天神社と坂元神社で同じ日にお祭りをやり、御輿によるケンカがあった。本当は出会う場所がきまっているだけなのだが、神社をでて町を練り歩き、途中途中で御神酒を飲んでくるから、出会いの場所に来るまでにはべろべろに酔っ払っている。それでお互いにぶつかり合った。御輿を海にいれるのは、中浜＝天神社だけであり、坂元はいれなかった。4 月で雪が降っていたときに海にはいったということもある。

神楽と地域社会

CT さんより。震災のせいで、自分のところに保管してあった白衣などもすべて流された。町の人と話していて、4 月の例祭は是非やりたいと思っていることが伺われた。仮設の人はやりたいと思っている。彼らは声をかけられるのがつらい。TK さんや SS さんたちが中心となって太鼓の寄付もしてもらうにいたった。現在太鼓は支所においてある。みんなからはやってほしいと言われている。ところが、まず着るものがない、面がない。ざっくばらんにいえば面がないのが問題。おはやし関係はそろっている。踊れる人も結構いる。今日までに地区の人々の状況がだんだんとわかってきた。それでそれぞれ関係者が、どこの仮設にいるのか、どこに避難しているのか、だいたいわかってきた。

面および太鼓について

CT さんおよび TK さん。中浜神楽の面は独特だが、とくに特徴的なのは鯛釣りの面である。普通この種は恵比寿様で、老人だが、うちのは若い。だから踊りも激しくなる。面の種類はたくさんある。鯛釣り、種まき、烏面が 2、赤鬼、青鬼、ひょっとこは 2 つ（男女）、よめご、きつね、天狗、といったところだろうか。地区の人と話していると、みんな一番のぞんでいるのが中浜神楽をみてみたいということだ。そういう声をよく聞く。特に最近よく聞くようになった。年配の人たちは笛太鼓の音を聞くと喜ぶ。

寄付してもらったが、太鼓をもらうのも大変な手続きだった。TK さんも SS さんも苦労を言わないから。もらえたからとだけしか言っていない。今は太鼓と笛だけでも自分たちが聞きたいと思う。自分たちもリズム感を取り戻したいから練習をしたいという気持ちがある。子どもには教えているが、自分たちもやりたい。子どもの練習は簡単なもの。全部やったら本当にむずかしいので、簡単な形にしてある（それだから満足できないというニュアンス）。

写真３　天神社の山の神のお社からみた町跡

写真４　坂元ドライブイン

学校での神楽教室

学校で教えていると、子どもたちは学校の先生の言うことはよく聞く。だけど自分たちのいうことはなかなかきかない。その場ではやるが、いなくなると元にもどってしまう。

自分たちの神楽はずっとつづいているものだ。子どもたちのは断続的。子どもを教えていても、高校へ行くとまず切れてしまう。

本当の神楽の踊りは一演目で 30 分ぐらい。正式にやると飽きるぐらい長い。踊りは大変だ。ところが大会にでるとなると時間制限がある。制限してしまったものや、子供用に簡単にしたものを伝承して良いのかと思うことがある。

踊りでおもしろいのは、よめご舞、遠刈田舞、ひょっとこ、など３つ４つだ。堅い踊りとおもしろいが混じっている。ここのは飛び跳ねるのが特徴だ。以前、大会にでたら民俗芸能の専門家に、はねて足裏をみせるのはよくないと言われたことがある。

不安

TK さんと CT さんより。今不安なのは、中浜小学校の行方だ。小学校の建物は震災の記念として保存されることになった。しかし学校そのものは坂元小学校に統合される可能性がある。以前は 150 人にいた生徒数は現在 30 名。現在は、坂元小学校の敷地と建物の一部を借りる形で、中浜小学校がある。現在小学校でおしえているのは、この中浜小学校の生徒である。吸収されると中浜神楽をのこせるか不安だ。坂元小学校になってしまえば、中浜神楽を中浜地区以外のこどもにおしえることになるし、中浜以外の地区の子が中浜神楽をまなぶかどうかが不安なのだ。だからまず大人が復活できていないと、と思う。大人が復活できていれば、この事態にも対応できる。ただ地区としての中浜地区の 90 パーセントは第１種扱い＝居住のための建造物を建てられない区域。10 パーセントぐらいしか残っていない。今は仮設を出て行く人がでている。遅れれば遅れるほど元に戻れなくなる。生活を考えれば、「今は神楽どころではない、と考える人もいる。自分でも（上記のようにおもいつつ）学校でやってくれればいいのかなとも思ったりする」（TK さん）。

面については、保存会の方にいろいろ再建の提案がある。けれど、うまくぴったり合わないと感じる。中浜神楽の面は、今風のものは違うのだ。町のなかでも、例えば山元町の深山の神楽の面をもってきれ見せてくれた。（にていればそれをもとに作り直すことになる）。でも違うのだった。教育委員会もうごいてくれている。やはり自分としては、中浜ならではのを残す必要があると考える。それなので、今悩んでいる。

学校での神楽教室

CT さんより。学校で教えていて難しいのは笛。昔の和音を音符に落としてみたが、むずかしかった。それで

TK さんが吹いている姿をビデオに撮った。昔、臨時の女の先生がいた頃だ。それをつかって子どもに教えた。今は笛を吹くのは女の子ばかり。今年小学校から 10 人中学校に進学したうち 2 人は今でも (小学校での教える会に) 手伝いに来る。太鼓が 2 人、笛が 1 人、踊りが 3 人という感じだ。

今後の希望

CT さんより。中浜区があつまればいいなあと思う。神楽どころではないが、神楽踊りをやるぞと声をかけてもらいたいと多くの人は思っていると思う。保存会の我々の動きはだんだん地区の住民にしられるようになっている。お年寄り達に、あの世に行く前に、是非みせたいと思う。